

## ライ麦畑の崖っぷち

金町中学校 三年 横田 明憲

書名「キャッチャー・イン・ザ・ライ」  
著者「J.D.サリンジャー」  
訳「村上春樹」

大人にとって健全な若者なんて、僕は居ないと思ってる。もし居たとしても、きつと数えるくらいだ。僕は昔から、大人に苦手意識を抱いてきた。反抗したいとかそういうのではなく。言うことは嘘くさく見えて、いつもなんとなく偽善だとも思ってしまう。芸能人の巨額の募金も、エリートコースを歩んでタワマンに住む人生のことも、いちいち卑屈な目で見てしまう。ただ一つわかってほしいのは、僕含め健全な若者たちはいつだって、「ライ麦畑でつかまえて」もらうのを待っているところだ。

僕はこの本を一人暮らしへの引っ越しのために荷物を整理していた姉から貰った。真っ白な表紙に紫の字でタイトルが書かれている。「キャッチャー・イン・ザ・ライ」。別訳版の「ライ麦畑でつかまえて」とうタイトルの方がポピュラーかもしれない。この変なタイトルの意味が、そのときはわかるわけもなかった。

話は、十六歳の主人公ホールデンが

寄宿学校を退学させられるところからはじまる。家に帰ることもなくニューヨークの街をほったき歩くホールデンが大人の世界に抱く失望や疎外感、不満、そして対照的な愛情や純粋さが、彼自身の口から、饒舌かつ繊細に語られる。

この本の面白さは、物語というよりも、ホールデンという若者の内面を徹底的にリアルに描いている点だと思う。ホールデンは常に作中で矛盾に満ちている。大人の見栄や欺瞞を嫌いながらも、自らも売春婦に対して見栄のために嘘をつく一面を持ち、学校の友人をからっぽの人間だと嘲りながらも、自分自身に生きる意味を見い出せないでいる。たくさんの矛盾、そして自分の理想と大人の世界との大きなギャップに、自分の居場所を見つけれずにさまよひ苦しむホールデンが葛藤する姿はあまりにもリアルで痛々しく、思春期の僕の心に強く突き刺さるものがあった。

作中、ホールデンは過激なまでに悪態をつく場面が多く見られる。正直なところ、どちらかというと僕もそういうタイプだ。老人のベルボーイに切ない人生だなんて思ったり、インチキクさい映画で泣く人に対して毒を吐く箇所なんかは、幼稚さを自認しながらも共感した。本当に心も視野も狭い人間だなと自分でも思う。ただ、自分自身の中に純粋な部分だって持ち合わせ

ていると思ってる。ホールデンだってそうだ。ホールデンの妹への愛や弟の死への大きなショックは作中でも印象的に描かれている。人は誰だって二面性を持つてはいるはずだ。僕は思春期真っ只中で、この自分の中の二面性に苦しめられてきた。僕の中の攻撃的だったり排他的だったりする部分ばかりが目立って、純粋な心も持っていることを他者がわかってくれない。「良い人間でありたい」「強い人間でありたい」という思いがあるからこそ、自分の実際の人間性の醜さ、弱さが邪魔して自己が確立できない。そんな僕含め多くの若者がかかえるであろう苦しみが生々しく綴られているからこそこの本は世界中の若者たちに、「これは自分の本だ。」と思わせてきたのだろう。

ホールデンという人物の純粋さが伝わるとても印象的な場面に、こんなものがある。彼の愛する妹のフィービーに、彼はこう言う。「ライ麦畑のキャッチャー、僕はただそういうものになりたいんだ。「ライ麦畑の崖っぷち」に立ち前を見ずに崖の方へ走ってくる子どもをさつと、キャッチする。そんな都合も社交辞令も何も関係ない純真な優しさを持った大人こそが彼自身の理想像だ。そして、それはホールデンがそんな優しさや愛に飢えていたということの裏返しでもある。このセリフは、大人の世界にもまれたホールデンが物語

の終盤に吐露した心の叫びに見える。この優しくて切ないタイトル回収に僕は衝撃を覚えた。

私の父はこの作品のことを「大人になつて読むと恥ずかしくなる小説」と言った。きつとその通りなんだと思う。僕にもこんな今だけの感情や考え方を恥ずかしいと思う日が来るのだらう。しかしそういうことを「成長」と呼ぶのだと思う。そうやって何かを失って、何かを手に入れるのが「人生」なのかもしれない。一方で、それは結構寂しいような気もする。今考えると姉がこの本をわたされたのは、「卒業」を意味しているようにも考えられる。(実際深い意味なんて全くないのだけれど。)

最後に、彼の恩師であるアントリーニ先生による詩の引用をここにも記したいと思う。「未成熟なるものしるしとは、大義のために高貴な死を求めることだ。その一方で、成熟したもののしるしとは、大義のために卑しく生きることを求めることだ」

僕の未来もホールデンの未来も想像はつかないけれど、この本に共鳴できたおかげで、少し肩が軽くなった気がした。  
(原文ママ)

